NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

第５章　二つの機械を守る男

THE MAN WHO KEPT TWO MACHINES

水門が開いたのは、予定より六分遅れてからだった。

ロイは水門の油圧装置が叩く間隔で遅れを数えた。ナディラは背後で音が減っていくことによってそれを測った。ステップウェルの向こうで石積みを探っていた捜索機材は、いつのまにか音を立てなくなっていた。撤退か、それとも方法を変えたのか。政府が撤退に予算を割くことは稀だった。

鉄の門の下に水が広がった。いくつもの司法管轄から流れ込んだ沈泥で黒く濁っている。旧地区はさらに古い地区の上に築かれ、やがて排水路の所有権をめぐる論争そのものになった。通路ではそれが文字どおり形を持っていた。ロイの頭の横の配管には、五つの異なる刻印が押されている。どれも既に無効だった。だが水は流れ続けていた。

ナディラはサリムから受け取った経路カードを、燐光塗料の細長い帯にかざした。

「ここを越えれば、この通路を認める登録簿はどこにもない。だから安全だと思わないで」

「君は天気のことを話すように、登録簿の話をする」

「天気のほうが、殺す相手を選ばないわ」

門が手の幅ほど上がった。ロイなら蝶番を曲げられた。実行する前に、必要な動作の構造が頭に浮かぶ。高速出力リザーブの急増、それに伴う回復不能な循環媒体の消費。そして得られる時間はわずかだった。彼は油圧機械が仕事をするのを待った。数秒なら支払える。ほかの支払いがいくらになるのかは、まだ知らない。

灰色の昆虫が天井の亀裂から降りてきた。六本脚に陶製の腹部、光学素子は塩の粒ほどしかない。濡れたボルトに触れ、金属の音を聞き、触角を伸ばした。

ロイはその下に手を差し出し、加速せずに指を閉じた。潰すのは容易だった。だが潰さない。裏返すと、腹部に印のない自治体保守用の刻印があった。彼はその機体を流れる水路へ押し込んだ。水が門の向こうへ運んでいく。そこで通信を失えば、報告は普通の故障になる。政府のセンサーを破壊すれば、敵がいるという報告になる。

二人は朝の中へ出た。通路には洪水の泥、安い消毒剤、熱い食用油の匂いが充満していた。

＊　＊　＊

川側の水門の上では、互いに翻訳されることのない言語で地区が目覚めていた。古い屋根を越えてムアッジンの声が流れ、市の水価表示板はリンギット建てから上層取引所の民間クレジットへとちらつきながら切り替わった。その下で手術用エプロンの女が男の人工親指を修理している。男はもう片方の手で茶を持ち、さして興味もなさそうに作業を眺めていた。修理台の脇には祈祷用の敷物が二枚、丁寧に丸められていた。浸水線より高い、乾いた場所に置かれている。

ナディラは、自分の所有ではないと言い張る水利権で朝食を買った。ロイには平たいパンと、請願書の入った薄いアルミ製の封筒を渡した。

「手に入れたのは経路よ。目的地じゃない」

「誰かがその経路を尾行したら？」

「経路そのものが気づく。それがエスクロー請願の要点。配送は許されるけれど、所有権は移らない。武装した省庁が『配送を拒む権利を誰が持つのか』と尋ねるまでは、単純に聞こえるでしょうけど」

ロイは封筒の型押しを読んだ。受取人の名はない。事件番号、NAR-41。そして受領証人のために空けられた欄。隅にはサリムが三つの大きさの異なる半円を組み合わせた記号を押していた。ロイの内部分類表にはない印だった。その分類表は不気味なほど広範だった。匂いだけで十数種の工業用接着剤を判別し、引張応答で合成軟骨を見分け、旧式路面電車の制御器の劣化したタイミ

ングパルスまで読める。なのに、システムの崩壊後に自分を目覚めさせられる人物へつながるかもしれない、この印を知らない。

「装置の場所を知っている者はいる」と彼は言った。

「ええ」

「そして、その知識が公共ネットワークに流れないようにした者もいる」

「それもそう」

「なぜだ」

ナディラはパンをちぎった。「国家というものは、名前もつけられないものを安全に没収できない。名前を覚えれば目録を要求する。目録を手に入れれば、その目録のまわりに牢獄を造れる。私たちは、いまとは違う意味で『安全保障』という言葉を使っていた機関から、その規則を受け継いだのよ」

ロイは川へ目を向けた。貨物用飛行船が二つの塔の間に浮かび、その炭素外皮には三つ先の政府の管区に本部を置く農業協同組合の紋章が描かれていた。下では検査ドローンが魚群のような無関心な正確さで群れている。政府所有もあれば民間リースもある。その違いは、誰を出国させるか決める瞬間まで見えなかった。

「請願は罠かもしれないのか」

「もちろん」

「それでも俺を連れてきた」

「読めないものへの署名をあなたが拒んだから。あれで危険の計算が変わったの」

「俺を知らないだろう」

「高価な機械と、自分の意志で間違える人間の違いならわかる」

ロイは黙った。かつて彼は、別の男の命を自分の手に握ったまま死んだ。そして最後に覚えている行動は、その命を続かせたことだった。それで聖人になったわけではない。最初の選択は、別の世界で起きた。次の選択は、そのつど新しく行わなければならない。

＊　＊　＊

岡京で川村室長が受け取ったのは、ステップウェルの画像が一枚もないという報告だった。その朝受け取ったなかで、最も役立つ画像だった。

省の監視フロアには、熱分布、ネットワークの認証記録、人工生命の登録、移動確率が並んでいた。すべての画面は、政府と数えられる対象との合意の形式だった。ステップウェルは建物の形をした空白として記録されている。空白には予算をつけにくい。

部下の分析官、植田は封印されたアナログ端末の横に立った。「音響探針が内側の水門の開放を検知しました。川側へ抜けたと推定できます。水路から保守ドローンも流出しました。システムは油圧系の事故と分類しています」

「事故だったのか」

「外部アンテナが本体に折り畳まれていました。破損ではありません。意図的です」

川村は考えた。対象は追跡機器について、脅威信号ではなく無害な故障を作り出せるだけの知識を持っている。追う機械より危険だということではない。見つかることの費用を理解しているのだ。

「受動監視を増やせ。現地の許可なしに武器は使用させるな」

「現場指揮官は、直接確保が可能だと判断しています」

「そう考えるのは自由だ。実行だけは許すな」

植田は待った。言い終えていない命令と、推測を求められている状況とを区別するよう訓練されていた。

川村は紙のファイルを開いた。旧タイレル研究への資金提供覚書が、ごく普通の事務連絡の間に挟まれている。中央計画 AI が最も見つけにくい場所だ。スキャンして旧企業の承継信託にある名

前を照合させることもできた。だが、しなかった。世界政府構想には人工生命の製造や労働配置を調整するAIが必要だ。しかし、六年の寿命上限が技術的に必然ではないと、AI自身に知られる必要はない。

統括大臣の執務室は提案中の制限をSLC-6と呼んでいた。認証された人工生命の稼働期間は六年。その後は強制的に退役させ、再資源化し、再発行する。公には分配の正義として売り込まれていた。特権を蓄積し、国家機密を保持し続ける恒久的な人工労働階級を作らないためだという。川村は、この表現がどれほど多くの論争を封じてきたか知っていた。人工の身体は役立つか、高価か、危険か、交換可能か。人々はそれを問うようになっていた。誰が最後の日を指定する権限を持つのか、とは問わないよう誘導されていた。

「エスクロー請願が開かれた可能性があります」と植田が言った。「裁判所の公開システムに動きはありません。ただ、水利当局がNAR-41で不審な物理的移送を記録しています」

川村はファイルを閉じた。

「ネットワークでNARの識別番号を検索するな」

「番号自体は既に知られています」

「ならば、その段階で止めておけ。照会すれば、未知のものと質問者とが結びつく」

「受取側は誰ですか」

「二台の機械を相続した男だ。その価値を本人も知らないかもしれない」

「名前は？」

川村の表情は変わらない。「この端末には入力しない」

かつて彼は、実験手順の全体を求めずにレイチェルの研究室へ資金を出した。あのころ生物学的な延命研究を支援するのは、政治的には平凡なことだった。失敗は資金提供そのものではない。人工生命の限界は、研究に金を出す側にも必ず見えるはずだと思い込んだことだ。

雨が外窓を伝う会議室を思い出した。レイチェルは古い記憶媒体を二本の指の間で回しながら、再起動できるシステムだからといって、その鍵を持つ者の所有物にはならない、と彼に言った。当時は法的な予防措置だと思った。いまは警告だったのではないかと思う。

＊　＊　＊

受領所には会社名がなかった。使われなくなった川の支流を見下ろす集合住宅の最上階にあり、廊下には湿った壁紙とプリンター溶剤の匂いがした。各戸の扉の真鍮板には、住人の名前ではなく年号が刻まれていた。

廊下の端で、左手が機械仕掛けの男が二人を迎えた。匿名でいることも熟練を要する仕事だと悟った者の、目立たない灰色の服装だった。

「ユースフ・ダルだ。受領証人と呼んでもらってかまわない。それ以外、ここですることは一切サービスではない」

ナディラが型押しの封筒を示した。ユースフは触れない。ロイに机へ置くよう求め、自分は一歩退いた。

「条件は三つ。請願はあなた自身のものであること。請願は所有ではなく復旧に関するものであること。そして、機械可読の複製を作らずに届けること」

「何かを復旧してくれとは頼んでいない」とロイ。

「まだ、な。いま尋ねているのは、その手段の所在だ。この請願は、後日あなたが手段を破壊することを選んでも有効でなければならない」

「妙な商売だ」

「高くついた歴史が、この妙な仕組みを作った」

ユースフは封筒の下に白紙を滑り込ませた。二つの圧力ローラーが走り、封を開かずに型押し文字を浮かび上がらせる。宝石商のルーペで位置を照合したあと、彼は住所ではなく面会可能な時間帯が記された受領証をロイに渡した。

「次の中立移送時に配達を試みる。返答は一度だけだ。保管者が拒否した場合、その拒否も記録する」

「保管者はタイレル家の相続人か」

ユースフの機械の指が止まった。「相続人は装置を所有していても、使い方を知らないことがある。ときに、それらは別の相続なのだ」

「元の記録はどうなった」

「それは答えられない。請願手続きが会社の消滅前に設計されたことだけは言える。設計者は、会社の死後にも誰かが再起動を必要とすると予期していた」

「誰を予期していた？」

証人はロイの視線を受け止めた。「それは私の職務の外だ」

金属の手が再び動いた。その人差し指の先には、現在ならどんなメーカーも選ばない古い表面仕上げがあった。関節に磨かれた陶材の小さな三日月が見える。ロイは異常な確信をもってそれを認識した。内部照合系が仕入先の候補を列挙する。その一つがテキサス・インスツルメンツだった。部品メーカーとしてではなく、旧式製造支援として登録されている。関連は弱く、信用できなかった。古いというだけで重要な意味があるとは限らない。

彼は受領証を取った。その紙は、紙が背負っている義務よりはるかに軽かった。

＊　＊　＊

階段を半分ほど下りたとき、建物の水道メーターが食い違い始めた。踊り場ごとに使用量が違う。やがてすべての表示が凍りついた。

ナディラがロイを見る。「誰もここのメーターを修理しには来ない。いっせいに止まるなら、誰かが水以外のものを測っている」

曇りガラスの外を巡回ドローンが横切った。作動中の走査光はない。光学系は暗いままだ。受動的で、辛抱強い。

「川村か」とロイ。顔を知っていたのではない。行動の規則性を読んだ。

「たぶん」

「停止させられる」

「停止したドローンを調べに次が来る。三階よ」

三階の部屋には六台の寝台と、壊れた家庭用サービスアンドロイドが並んでいた。胴体から高価な部品は抜き取られているが、顔は残っている。子供がその間にあぐらをかいて座り、空になった手の指に色付きの銅線を通していた。

「あれは死んでいるのか」とロイ。

「退役したの。所有者はリースを返した。でも、それが何を意味するのか、ここにいる全員が同意したわけじゃない」

台所から中年の女が金属の水差しを持って現れた。封筒を一度、ナディラを一度見て、祈祷書の棚の裏にある狭い点検口を開いた。中は水道管でいっぱいの保守シャフトだった。機械式のハッチすらついていない。古い設備には、新技術がなかなか宣伝できない種類の信頼性がある。誰も金を払って賢くしようとしなかったのだ。

ナディラが先に下りる間、ロイは待った。三階の窓の脇でドローンが停止する。モーターの音程が変わった。探索アルゴリズムが、建物のメーター障害に統計的な不自然さを見つけたのだ。

窓越しに声が聞こえた。「市の設備保全検査です。その場で待機してください」

女は水差しを蛇口の下へ差し入れ、水を流し始めた。

「何年も毎月検査しているじゃないか」と彼女は言い返した。「どうして交換用の封印を一度も持ってこないんだい」

ドローンが指示を繰り返す。

ロイはシャフトまでの距離、女の危険、子供の位置を測った。高速出力リザーブは複数の軌道を提示する。ひとつを除き、すべて損害で終わる。そのひとつは暴力ではなく、待つことから始まった。女は水差しを満たし、棚の前へ移動して自分の体でドローンの視線を遮り、顎で穴を示した。

ロイは闇へ身を下ろした。

一瞬、ドローンに聞こえるのは水音だけだった。次に子供が退役アンドロイドの一台を動かした。壊れたスピーカーから子守歌が流れた。どこかで知っているような古い旋律が、間違った音程に分解されている。その音がマイクを占めている間に、ロイの足音は奔流する配管の下へ消えた。

彼は子供に礼を言わなかった。記録される言葉を口にすれば、彼女を危険にさらすかもしれない。

＊　＊　＊

一キロ離れた密閉車両の中で、現場士官が集合住宅への突入許可を求めた。川村は却下した。

「音響追跡の確度は高い。対象は設備シャフトを下降中です」

「ならば上の住民を騒がせずに行先がわかる」

「見失うおそれがあります」

「対象が自分に必要なものを探すのをやめれば、こちらは何も学べなくなる」

士官は黙った。川村はこの沈黙が嫌いだった。多くの場合、士官は怒りを部下にぶつけるために取っておく。

「植田。請願が届いたか調べろ。エスクローの管理人には接触するな。知りたいのは一つだけだ。誰かが返答し始めたかどうか」

「受取人が返事をすれば、返信を追跡できます」

「そうかもしれん。ただし返信を機械に入れるな」

なぜ信用してはいけない機械を省が雇っているのか、植田が尋ねる前に通信を切った。

＊　＊　＊

保守シャフトの暗がりで、ロイの診断用リザーブは通常の上限へ向けて回復した。循環媒体は戻らない。真の容量は測れなかった。最大加速を許可するシステムの反応が、少しずつ鈍っている

のがわかるだけだ。休んでいる間にも、二つの読み取り値の差は単位を割り当てられないほど微細に広がっていた。彼の内部では、存在することそのものによって何かが使い果たされていた。

ナディラは放棄されたポンプ回廊へ出て、コンクリートの縁に登った。ロイも続く。頭上の古い水路は、露店が並ぶ橋の下を流れている。値切り声、箱へ投げ入れられるハードディスク、コーヒーミル、店の正面に取り付けた小型スピーカーから流れる祈り。下から聞くと、自分の配管の上に吊り下げられた文明のようだった。

「保管者の返答はいつ来る」と彼は尋ねた。

「誰にもわからない。中立移送は暦の上の時刻じゃない。条件なの」

「どんな条件だ」

「双方が、ネットワークに載せたくないものを持っているとき」

ロイは受領証を見る。日付欄は空白で、証人欄には文字とも公印ともつかない印がある。古い記録が正しければ、タイレルの治具は二セット。保管者は死んだ男の息子。ロイの身体のあるシステムは、重大な損傷でキャッシュが使えなくなるまでは、自分自身のキャッシュで再起動できる。深圳の部屋で目覚めたときには、これらを何ひとつ知らなかった。知識はある面では彼を安全にした。しかし同時に、依存の度合いを計測できるものにもした。

ナディラは受領証をしまう彼を見ていた。

「それでも残りの寿命を知りたい？」

「知りたい」

「答えが六年だったとしても？」

「最初にも、その答えを与えられたことがある」

彼女は意味を尋ねなかった。怒りというより、古い測定値を告げる声だった。

二人は水に浸かった回廊を、格子から光が差すところまで歩いた。頭上のどこか、プドゥ・アルファの幾重にも積み重なった管轄の中で、省は配管と紙と、知っていることを語ろうとしない

人々に耳を澄ませていた。同じ時刻、どの都市の登録簿にも載らない部屋で、ひとりの保管者が表に宛名のない封筒を受け取った。

彼はそれを、何年も電源を入れていない二台の機械の脇に置いた。

封印には見覚えがあった。

まだ開封はしなかった。